

# 第10回長岡インディーズムービーコンペティション 最終審査評

## 「ほらね」

「役にたちます」と書かれた便利屋の宣伝に入っていたミニタオル。水がこぼれて、すぐに役にたった。帯紙のウラに「ほらね」と書かれている。その他のことがこの映像からくみとれるだろうか。日常の中の「恐怖」は少し感じますが。

小林

なんとも不思議な作品だった。おもしろいと思えるほどには「ほらね」の意味がよくわかりませんでした。すみません。

井上

着眼点、アイデアは面白いと思う。でも、このアイデアで押すならば、もっと「ほらね」で畳みかけて欲しかったし、ホラーチックに撮っていったもののオチがないのが残念。

五藤

技術的に上手く出来た作品。内容と特にオチに関してもう1つのアイデアが必要だと思います。

ビューラ

ストレートに見せてくれて、短さが潔い。ただ、勢いだけでは弱い感がある。

菅野

やられたなって、音楽にびっくりして何か怖いことが起きるのかと思ったら、ただ読んで字のごとし。おかしくって笑いました。(感想)

司会: 関矢

## 「南京との再会 ―時代の河をさかのぼる旅―」

自らの教師生活の中で、社会の変化による圧迫感から教師をやめたのち、なぜ南京なのか。しかし、中心は上田さんという従軍看護師にうつり、ラストは日本にかえったところで終わる。映画を撮りすすめる中で「発見」したのは何か。旅行記録に終わっていないか。上田さんの「日本兵の死」の陳述がはっとして、たとえば、それを主題にするかなど、切り口を示してほしい。

小林

22歳の若者へのインタビューなどおもしろい画づくりだった。編集もきちんとしていて飽きさせない。もう少し、自分の身近な問題をシニカルに見つめた方がいいと思うが、この作品を作りあげたことはすごい。

井上

元従軍看護婦の上田さんが「死というものが平気で受け止められる」と戦争時のことを語っていた。このように上田さんを語らせるもの、これは実際の戦争というだけでなく、上田さんの心にあるものだと思うが、それにもっと迫ったらこの言葉がもっと心に響くものになったと思います。

東條

東京と南京の風景にもう少し違う印象を与えてほしかった。南京で何を言いたいのがよく分からなかった。取り上げるテーマは重く、こうした題材を取り上げる事は重要だが検証がないままにごく主観的な視点で見ているのが残念。日本女性(上田さん)が、テーマを表すコメントを的確にしていけないので、出てくる意味があまりない気がする。というよりテーマがぼやけていて何を伝えたいか分かりづらい。

五藤

戦争と特に南京の虐殺を論じる点はすごく大切ですが、「南京との再会」ではその時代の新しい情報があまり伝わりません。しかし、自分らしいアプローチと監督のコミットメントを尊敬しています。

ビューラ

明確なテーマは観客におぼろげに意図が伝わるが、歴史の重さを前にすればこの短さについて食い足りなさが残る。

菅野

映画は上映して完成すると思います。せっかく素晴らしい映画を作ったのですから上映会を行なって広げて行ってほしいと思いました。(感想)

司会: 関矢

---

## 「好きすぎて、眠れない」

きちんとした画作りで感心しました。ケータイ占いで恋をしたり、はなれたりという現代の高校生とその仲をとりもつ友人との関係をテーマにしたものでしょうか。30分を使って、描く、もっと強いモチーフに挑戦してほしい。

小林

撮影、演出技術ともに、自主映画としては最上級なんだけど……。もうちょっと、「花とアリス」みたいだけ違う!といった感じがほしかった。

井上

いろいろな風景を楽しませてくれた。撮影の苦勞が忍ばれる。その風景の音が後からとってつけたかのような音に聞こえたのは残念。技術的に可能ならば同録できればもっと作品の雰囲気よくなったのではと思った。

東條

乙女の世界を描こうとしている努力は分かるし、丁寧に撮ろうとしている姿は清々しい。でも、それだけに脚本をもっと練ってほしい感じがした。話が何のフックもないまま流れがちなので、ライトに見れるが、気持ちが残らない。キレイな画を作れるので、シナリオをもっと勉強すればよくなる可能性はある。

五藤

確かな役者の演技で高校生の悩みと希望を魅力的に表現した作品。ストーリー構成をもうちょっと絞ればもっと見やすくなります。

ビューラ

演技、撮影、構図ともにさえていて素晴らしい。しかし、物語の他愛なさが印象に残らない。

菅野

とてもよく出来た作品だと思いました。でも、もっと観ているこっちが暗闇の中でなけりやはずかしくて観れないほどの映画の方が青春のお話としては好きです。(感想)

司会: 関矢

---

## 「透視せよ！ タケオ」

ひきこりの青年の心情を映画のパロディーを使いながら描いた秀作である。ユーモアにもあふれ、映画制作にも習熟している。映画ならではのおもしろさがある。心をぐっと動かす何かがあるのではないだろうか。

小林

これはもうこれで、一つの商業作品として成立してしまうと思う。むしろ商業映画よりエンターテインメント性は高い。自主映画の面白みはちょっと薄かった。

井上

お客さんのことを考えてよく作られている。ニートを面白おかしく扱っていて、見るものを楽しませてくれるが、作品としての物足りなさを感じる。ただ、ストーリーを映像で見せるという技術については、十分水準に達していると思う。

東條

のっけに出てくる「どですかどん」といい、モノローグ、セリフがセンスあって面白い。端々にコミカルなセンスが溢れていて上手い。もう少しオチで笑わせるか泣かせるかしてくれたら、もっとよかった気がする。ちょっと残念。

五藤

オタク系の引きこもっている若者の話。彼の世界の色々なメディアから取ったイメージを面白く日常生活に織りました。音も全作品に同一性を守って丁寧にできてますが、内容的に何か見たことがある感じが残っています。

ビューラ

ボンクラの願望をそのままストレートに描いたら面白くなるのに期待していた別方向に進むのが残念。

菅野

女の子がおもちゃのバットをタケオから借りて素振りをするシーンにジーンと来ました。ラストシーンは良く分かりませんがこの女の子のピュアな愛(無償の愛)がこの映画のテーマを象徴しているように思いました。映画もとても楽しく鑑賞できました。(感想)

司会: 関矢

---

## 「アンブレイラ」

不連続の写真で構成し、音をいれた作品。何かわめきたい青年の気持ちを表しているのだろうか。これが写真風な映像でなかったら、どう見えるだろう。アンブレイラに何をたくすのか、それを考えてほしい。

小林

楽しんで作っている感じは伝わってきました。役者さんもなかなかいい表情。こういう思い込みで映画を作るのもいいのかも。なぜあのTシャツなのか気になった。

井上

アイデアとして興味深いと思った。コマ撮りでしかできない運動の表現も随所に見られて面白かった。そのアイデアだけでも楽しめるが、その先にあるものを期待したい。

東條

若い勢いや楽しそうに作っているところはいいなと思った。しかし、カサを武器にする設定が生かされていない。奇抜でのいいが、観る側も楽しませてほしかった。

五藤

内容的によく考えた面白いアイデアと思います。付けた視覚効果が目立ちすぎている。一番気になったことは、喧嘩というありきたりな展開です。それより、傘が開いている状態の映像を強調して作ってあればもっと応援します。

ビューラ

見せ場をほぼ省略しながらも見せてくれる勢いは買える。しかし、世界観が存分に生かされていないのはもったいない。

菅野

バカバカしさもことんやるととても素敵になるんじゃないかと思います。もっとバカやっても良いのかも知れませんが。(感想)

司会:関矢

---

## 「三河島ジャンケンポン」

在日コリアンの監督作品と思われるが、子どもの頃の出来事からヒントを得た作品であろうか。子どもの頃の男の子との出会いのシーンは秀逸。そして約束。子どもの頃の約束を青年となって二人で果たすことを予感させるラストが前半と対比的に描かれる。シンプルだが力強い。しかし、同じ電車にのり続けたであろう二人の再会が不自然のようにも思える。

小林

「映画はこういうもの」という枠にはまりすぎている。計算のしすぎ。はじまりの都電のシーンはよかった。そのまま子供の世界をつらぬいてほしかった。

井上

最初のタイトルのデザインや、エンドロールのデザインも、作品の雰囲気を感じさせて楽しませてくれる。エンドロールも作品の一部ということを思い出させてくれた。作品として、映画的な気持ちよさを感じさせる作品。子供だった男の子と女の子が再び大きくなっていきなり登場するが、それを見る人にちゃんとあの二人だと思わせる。子供の時と同じ電車の車内という空間なのにその時間経過を無理なく感じさせてくれる。踏切のシーン。子供の二人の間を裂いて二人のつながりの終わりを告げた電車が、大きくなった二人の前にも再び現れるが、二人の間を裂くことなく去って行くシーンで、二人の可能性のある未来を感じた。まだ、荒削りなところも多いとは思いましたが、見ていて本当に楽しかったです。今後の作品にも期待します。

東條

音楽ノートがハングル文字というのが良い。木の枝で地面に書いた地図や、遮断機で分断されるシーン、それが布石になって数年後遮断機が生きてくる使い方など上手い。エンドロールの線路もいい感じ。民族問題の取り上げ方がちょっとステレオタイプの気がするが、好感もてる作品。

五藤

非常に魅力を持っている荒川線の路面電車をストーリーの流れの為に上手く使用した作品。子供の演技指導が素晴らしくて、映像のデュレーションにちょうど合わせたコンパクトさや見やすい話です。

ビューラ

繊細な表現にこそ宿っているべきはずの狂気の痕跡が見当たらなかった。

杉田

(次ページに続く)

物語の展開に苦しい面があるが余計な台詞はなく登場人物の感情が伝わるのは素晴らしい。願わくば物語の後を見たい。フィルムの色感も新鮮でいい。

菅野

まず、子供に未来を託すより自分たちの世代でできることを描いて欲しいと思いました。次に、テーマに囚われ過ぎたため人間が出て来ていないのではないかと思います。登場人物は書類の記入例の〇〇〇〇さんと同じようで誰でもよいように思いました。朴さんでも関矢でもいいのでひとりの人間を撮って欲しいと思いました。ただ、映画づくりにたいする意思みたいなものを観ていてスクリーンから感じました。(感想)

司会: 関矢

---

## 「走馬燈」

短編らしい優秀作品である。死ぬ前に自分の過去を見直すという故事から発想を得て、自らの人生をかえりみると何も無い。しかし、最後に母からの電話で助けられるという結末。ラストの部分をもうひと工夫して、辛口のまま仕上げるのはどうだろう。

小林

せまい空間をアングルでうまく見せている。新聞も完璧。制作的にも賢い・・・けど。この作品を作りたい!という思いは伝わらなかった。

井上

最後はどうなるんだろうとずっと思わせる作品で、ストーリーは面白く、良くできていると思った。しかも、ただ二人の会話の中で十分に映像でお客さんを楽しませながら見せることにも成功している。新聞勧誘のおじいさんも良かった。

東條

アイデアがとても面白い。テンポもよく展開も上手い。話に引き込まれる感じがする。先の展開がどうなるのか期待させられる。しかし、終わり方があっけなく、ちょっと物足りない。もう少しオチがついた方がよかった気がした。

五藤

すごく良いタイミングでぴったりの長さのショートムービー。楽しんで見ました。

ビューラ

老人と若者の人生観の対比がよく理解できた。うまくふくらませればとても見応えがあると思う。

菅野

やはり演技のうまい俳優を使うと良い作品になるんだなと思いました。もうちょっと何かあればすっきりしたのですが。(感想)

司会: 関矢

---

## 「家族日和」

離婚した夫婦、月一回、父に会う娘。その父の気持ちや娘の感情がよく伝わり、熟練した作品となっている。しかし、もう一歩、娘の気持ちに踏み込んでほしい。そうすると、車中の会話～夕食の家の感情が流れてゆくと思う。またちがう転回が考えられるかも。パンチがほしい。

小林

役者さんの演技が魅力的になるようによくねばっている。カメラの使い方、カット割りもうまい。母と暮らす家が少しい家すぎる気はする。新しい才能という感じではなかったが手固いつくりで、少し泣けました。

井上

公園のシーンのあとの車の中の二人。このシーンの二人は非常に良かった。親子が別れるというだけでなく、恋人どうしの別れにも見えるなにか雰囲気も感じた。車から娘が降りて行く先は、電線が張り巡らされている。なにか、娘の先行きをはばんでいるようで、これから進もうとする未来にも不安を感じさせた。

東條

別れた父と会いに行く娘に対する母の態度、「学校はどうだ?」、誕生日プレゼントなど、エピソードや展開、セリフにももう少し新しさが欲しい。やろうとしていることは大切なことだと思う。作り方が感傷に浸っているのが独りよがりの気がした。観る側がおいていかれる感じがするのが残念。それでもこうした人間を見つめる作品を作り続けてほしい。

五藤

(次ページに続く)

現在の世界に必要なテーマで感動できるプロフェッショナルな作品。ただ、ストーリーを伝えるためのシーンと主人公の特徴を表現するためにステレオタイプをよく使っているのは少し問題。

ビューラ

主人公である娘の肉体と声に説得力が無く脚本をなぞっているにすぎない。登場はずかながらも不穏な佇まいを感じさせる母が存在感を放っていた。

杉田

娘の思惑を超えて父親の器の大きさを思わせる。ダメ親父を演じる父親の妻は切ない。しかし、家族の和解ならばあともう一押しインパクトが必要ではないか。

菅野

家族をテーマにした作品をつくることは大変だと思いますがとても大切なテーマだと思います。いい作品でした。(感想)

司会:関矢

---

## 「Loved Letter」

撮影も編集も構成もうまいと思いました。ビデオレターで今の彼氏を紹介して、昔の福岡にいる彼氏に報告する。報告を受けた青年の気持ちはにじみ出ていたように思いますが、それ以上感情移入ができませんでした。社会的なテーマを背景とするようなドラマを作ってもらいたいと思いました。

小林

運転するしゅうじくんが印象的。ラストカットよかった。女の子が単なるかわいい女の子じゃなくて残酷なんだけどかわいい。社長もいい。

井上

ビデオレターの撮影シーンはとても面白かった。それを家族ではなく元カレに送るというのも意外性がある面白。女性が非常に無邪気に残酷なことをしているということが面白かった。

東條

綺麗な映像と手馴れた感じの作りで見やすい。しかし、展開がどうなるのか期待して観ていたが、元カレに今の彼氏との仲のいい様子をビデオレターで送るという展開に唖然としてしまった。こんな女性が本当にいたらデリカシーなさ過ぎだと思う。せっかく綺麗な映像を撮れるのでシナリオをもっと勉強して頑張してほしい。

五藤

悲惨な話もありますが、見る時に苦しくはない。撮影技術や基本の構成とタイミングもよくできてオリジナリティがあります。ストーリー的にかなり短縮が必要だと思います。もしくは話を切替え出来るもう1つのアイデア。

ビューラ

映像の美しさが突出しているが女性の残酷さを存分に描くインパクトが好みが変われると思う。ラストショットの何気なさに救われたのがいい。

菅野

夏の終わりのようなさびしさやせつなさを感じる事が出来ませんでした。多分、主人公に対して自分がいなくてもこいつ大丈夫だろうと思ってしまったのかも知れません。(感想)

司会:関矢

---

## 「しましまちゃん」

丁寧に作られている。人との関係を十分に結べない女子学生の心情を描く。話しの転開もおもしろい。間がすごく効いている。複雑な心境をしましまにたくしたのだろう。

小林

「しましま」のモチーフはいらぬ気がした。ただシンプルに演技を見せるだけでいいと思う。撮影が微妙にとちっているんだけど、それも味わい深い。

井上

自分をうまく表現できない女の子をとてもチャーミングに描けている。ストーリーも非常にシンプルなものながら、映画を見ながらいろいろなことを想像させたり考えさせたりさせてくれて楽しかった。

東條

タイトルの出方がいい感じ。ポップな感じの作りがいい。しましまのクツ下も面白い。何となく可笑しさがこみあげる押えたユーモアにセンスを感じる。主役女性の演技が味があっていい。ちょっと切ない感じがよかった。でも、もう少しグッとくるとよかったように思う。惜しい。

五藤

撮影技術やストーリーのオリジナリティ、音を含めて満点のショートムービー。残念ながら大げさな演技のせいで主人公と関係しにくく、単なる関係ない人になってしまいます。

ビューラ

さえない女の子のさえない恋愛感と日常は伝わったが要の面白さがなく評価しづらい。

菅野

ホテル事件がもっと他の出来事だったらこの映画にのめり込めたと思います。(感想)

司会: 関矢

---

## 「博士の部屋」

奇抜な発想とそれを支える美術、役者。異空間に紛れ込んだ感覚に遊ぶことができる。数日間、絵の中の植物の成長と顔にはえた植物の対話によって、自らの生命力を取り戻す。もっとだいたんでもよかったかもしれない。

小林

彼女の踊りが素敵でストーリーなどいらぬくらいだった。この作品はこの作品でいいと思う。ほかの作品と比べにくい。

井上

発想が面白い。ただ、植物学者という設定の男が、研究室の部屋の美術も含めて、植物学者に見えず、作品に入りこめなかった。もっと、リアリティを問題とさせないような作りでできれば良かったのにと思いつながら見た。

東條

何かの展開を期待させるはじまり、タイトルの入りなどセンスが感じられる。アイデア、映像、美術センスがいい。展開がどうなるのか、楽しみに観ていたら、ちょっと抽象的になり過ぎた感じがした。花が咲く理由もストーリー展開にうまくつながればもう少しよくなる気がする。惜しい。

五藤

たくさんアイデアを持ち、1つの読解方向に限られないストーリー。

ビューラ

映画では語りきれないこともある。それをふまえた上で表現していた唯一の作品。惜しむらくは監督と主演女優とが共犯関係で結ばれていくまでには至ってないこと。

杉田

二人の俳優の不思議な存在感が特筆されるが後に残るものがうすい。

菅野

ちょっと変わった作品で楽しめました。(感想)

司会: 関矢

## 「パンとキリスト」

ドヤ街の中にあるキリスト教会を舞台にしたことはわかるが、何をいいたいのか。よくわからない。パンをもらうためにホームレスの人が集まる姿から何をいいたいのか。その人たちが、それがきっかけだけでも、信仰をもつようになるということなのか。音声にインサートを続ける構成。教会から出される人にカメラがいかない。分からない。何かひとつ言いたいことを言ってほしい。

小林

何を言っているのか、よくわからないんだけどおもしろい。作家が何をしたいのかはわからないんだけど、おもしろい撮影素材を見つけたもんだと思う。自分の痛みなどあるともっと別のおもしろさがあるんだけど、無理しなくてもいいかとも思う。

井上

教会の中で説教しているのに、全く聞く気もなく座っている人もいる。寄せ場のおっちゃんたちは何で教会に説教を聞きに来ているのだろうか？野宿している人は外の寒さをしのぐためか？パンのためか？たぶんどちらもそうなんだろうと思って見る。教会の中での説教シーンが続く。アジテーションのように説教をする牧師。おっちゃんたちには全然、言葉が届いていないように見える。どういう思いでここにいるのだろうか。最後に、野宿者の一人が、「来るという行為が自分自身の精神生活を支えている」と言った。キリストの教えがどうかというより、そこに集まらなければ彼の精神生活が支えられない、その孤独感を強く感じて、胸を打たれた。

東條

弱い人に目を向けようとする姿勢は好感持てるのだが、取材対象の人々から何を描こうとしているのか分からない。ハーモニカを吹いて、「上手いですね」だけでは何を伝えたいか分からない。

五藤

内容的に、そしてそれに合わせた表現に関して素晴らしい作品。ドキュメンタリー映像に沿ってキリスト教の布教活動とホームレスの普通では見えない世界を覗くことができるからすごく面白い。キリスト教の思想の狭さと現在の衰退した状態、その上、宗教の基本的な機能と本質を上手く視覚的に表現できました。考えさせられるものです！

ビューラ

風呂敷を広げてしまったものの、丁寧に畳むべきかそのまま放置するべきか作者にも分からなくなったのでは、でもそれが狙いなのかも。最高点はつけたが。

杉田

神の救済という深すぎるテーマがこちらに明確に伝わらない。

菅野

記録映画は継続なくして映画となりえないのではないのでしょうか？(感想)

司会:関矢

以上